

豊後臼杵藩旧蔵の城絵図群に関する一考察

—『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』の内容検討より—

白 峰 旬

1. はじめに

大分県の臼杵市立臼杵図書館には、旧臼杵藩主の稲葉家から引き継いだ膨大な絵図資料群が所蔵されている。この絵図資料群に関して平成13年（2001）度から同16年（2004）度までの4年間に国庫・県費の補助を受けて調査が実施され、その報告書として『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』⁽¹⁾（以下、本稿では『報告書』と略称し、本稿で示す各絵図の番号は『報告書』における各絵図の通番に対応する）が同17年（2005）3月に臼杵市教育委員会から刊行された。

この『報告書』に収録された平井義人氏の論文「臼杵藩における絵図の製作と利用・管理に関する若干の考察」⁽²⁾では、臼杵市所蔵絵図資料群について、①年記のある絵図については、ある一定の時期に特定の性格の絵図が集中する傾向が見られる、②その具体例として、延宝期の絵図が15点あり、この中で大坂の陣を描いた2点の絵図を除くと、すべて城絵図である、③年記はないが軍学者の渡並景倭・渡並景庭の添削による臼杵藩主稲葉雍通・幾通作成の縄張図が集中して存在し、これらの縄張図は江戸で作製されたと考えられる、④お手伝い普請にかかわる絵図の類いはまったくない、⑤この絵図群は多くの史料群から寄せ集められたものである（臼杵藩庁の複数の部署から集められて、この絵図群が出来上がったと考えられる）、⑥臼杵城の修理等に関して幕府へ提出した年記の入った絵図の控えは2枚のみであり（引用者注：2と5の絵図を指すと考えられる）意外に少ない、⑦『稲葉家譜』では絵図製作の記事は意外に少ない、⑧『城・合戦・国々図目録』に記されている絵図群は寛政11年（1799）よりもかなり以前に既に目録が作成されて管理されていたものであった、⑨『城・合戦・国々図目録』は全国の城・合戦・国々図のコレクションであり、いずれも臼杵藩の所領支配とは関係のないものばかりである、などの指摘をしている。

平井氏によるこれらの指摘内容は示唆に富むものが多いが、上記②については、延宝2年（1674）の丸亀城絵図（16）、大坂城絵図（17）、同6年（1678）の相州三増合戦図（647）について平井氏は見落としているので補足が必要である。そして、平井氏が延宝期と指摘する15点の絵図のうち、臼杵城絵図のみは延宝期に作成された絵図であって、延宝期に写された絵図ではないので、その意味で峻別すべきであろう。また、平井氏が延宝期と指摘する大坂城絵図（400）と郡上八幡城絵図（504）は『報告書』には延宝期に写されたとする記載はない。なお、この延宝期に写された城絵図については、本稿で改めて検討することとしたい。

そのほか、上記④の指摘については、本稿で検討するように、寛永5年（1628）の大坂城の普請丁場割図があるので（392、393）、この指摘を是正する必要がある。

また、川村博忠氏は、この絵図資料群の特徴として、①他地域の絵図が多く、臼杵藩領内絵図の割合は19.7%（795点中157点）にすぎない、②江戸時代前半期の絵図が多い、③城図・合戦図が多い、④豊後と隣国との境界図が多い、という4点を指摘している⁽³⁾。

上記の平井氏、川村氏が指摘した諸点を考慮したうえで、本稿では、この『報告書』の内容をもとに、臼杵市所蔵絵図資料群の中における城郭関係絵図に特に着目し、その概要の把握を試みたい。

※臼杵市所蔵絵図資料群の中の一部の絵図については、大分県立歴史博物館の平成17年度企画展「殿様のコレクション—臼杵藩と絵図—」(2005年12月16日～2006年3月12日)において展示され、その展示図録も刊行されている。また、この絵図資料群の中の「寛永江戸全図」(657)が寛永19年(1642)11月～同20年(1643)9月の江戸城下を描いた図(最古級の江戸全図)であることが金行信輔氏の調査であきらかになり、新発見として大きな話題になった。

2. 『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』の絵図分類

まず、『報告書』では臼杵市所蔵絵図資料群(絵図の総数は1081点)について、表1のように11に区分し、それ以外に損傷絵図としての区分を別に設けている。表1をみると、1を臼杵藩関連とし、2～8の区分は日本国内を各エリア別に区分したものであることがわかる。各区分を絵図の点数で比較すると、損傷絵図の286点を除くと、最も多いのが1の臼杵藩関連157点であり、次に6の中部地方関連155点、5の近畿地方関連102点、2の豊後・豊前国関連77点、3の九州地方関連(既出分は除く)74点というように続く。なお、2の豊後・豊前国関連77点、3の九州地方関連(既出分は除く)74点を合計すると151点になるので、1の臼杵藩関連を除く九州地方関連は6の中部地方関連について多いということになる。逆に8の東北地方・「蝦夷地」関連は32点であり、日本国内のエリア別区分では最も少ない。このように、絵図の点数では九州・中部・近畿の各地方の絵図の点数が多く、九州から離れた東北地方及び「蝦夷地」の絵図の点数が最も少ないことがわかる。

次に、『報告書』でおこなわれている各絵図の分類(損傷絵図286点は分類がなされていないので、損傷絵図286点を除く795点の絵図に関する分類)について、絵図の点数が多いものからソートかけたものが表2である。表2を見ると、城絵図の点数が211点であり絵図資料群の中で突出して多いことがわかる。この211点という数値は、分類されている絵図総数795点を100%とした場合、26.5%であり、全体の4分の1強を占めている。また、『報告書』の分類では城下絵図や合戦図になっていても、その中にも城絵図は含まれているので、城絵図の実質的な合計点数はさらに増えることになる。このように、絵図資料群において城絵図の占める比重は非常に高いことがわかる。

3. 拙案(白峰案)による城絵図のカテゴリー分けについて

上述の諸点を前提として、本稿では筆者(白峰)の考えによる絵図資料群における城絵図のカテゴリー分けをおこなった。それを示したものが表3であり、表3の区分について各絵図の通番を対応させたものが表4である。表3を見ると、稲葉家の居城である臼杵城関係の絵図(A)だけでなく、広く全国的に城絵図を作成・収集したことがわかり(B、C、D、E、F)、その中には一定のテーマに沿って城絵図を作成・収集したケース(F1、F4、F5、F6、F7、G)や、特定の時代に集中的に城絵図を作成・収集したケース(F2、F3)があったことがわかる。また、架空の城絵図(縄張図)を作成・収集していたケースもあった(F3、G)。このほか、表4を見ると、一つの城に関して複数の城絵図が存在したケースも多かったことがわかる。以下、表4の内容と『報告書』における各絵図の摘要等の記載を参考にして、本稿筆者(白峰)の

考えによる城絵図のカテゴリー分けに沿ってその概要を検討していきたい。

【A. 臼杵城関係の絵図】

臼杵城は稲葉家の居城であり、その関係絵図が多いのは当然と言えるが、臼杵城絵図としては18点確認できる。その中で、幕府に提出した臼杵城修補（修築）願絵図の控図としては、延宝4年（1676）4月18日付の絵図（2）、宝暦14年（1764）4月付の絵図（5）、文政期頃と推測される絵図（14）、近世初頭と推測される絵図（16）がある。臼杵城修補（修築）願絵図の下書きとしては、承応3年（1654）3月11日付の絵図（1）、延宝期頃と推測される絵図（3）、時代不詳の絵図（17）がある。このほかに、臼杵城修補（修築）願絵図の元図（プロトタイプ〔基本型〕の絵図）と思われる絵図（4、6、8）もあり、修補（修築）願絵図の作成経緯を知るうえで貴重な存在である。

建築関係の指図として、臼杵城本丸屋敷（表御殿・奥御殿）の指図（100）、幕末頃と推定される臼杵城二の丸屋敷指図（101、103）、臼杵城本丸屋敷指図（102）、臼杵城本丸指図（108）のほか、指図下書きとされる臼杵城二の丸御殿絵図（110）がある。

特異な絵図としては、墨線を直線的に描く様式的な縄張図（12）があり、年代としては万治3年（1660）～延宝5年（1677）に比定されている。

城下絵図では、正保城絵図作成の下書き（24）やサンプル（23）とされる絵図がある点に注意される。

【B. 豊後国内の城絵図】

豊後国内の城絵図としては、府内城絵図（212、213、214）、佐伯城絵図（218）、岡田山城絵図（215、216）の3種である。府内城絵図（212）は導線表記があるので正保城絵図との関連が想定されるが（正保城絵図の下書き、或いは、写し）、正保城絵図の影響を受けた後の時代の絵図の可能性も考えられる。佐伯城絵図（218）は幕府へ提出した修補願絵図の控図であるが年月日は不明である。岡田山城というのは中世城郭と思われるが、現在地の正確な比定についてはよくわからない⁽⁴⁾。

【C. 豊前国内の城絵図】

豊前国内の城絵図としては、中津城絵図（217、220、221）と小倉城絵図（219）がある。中津城絵図（217）は幕府へ提出した修補願絵図の控図（文化10年〔1813〕11月17日付）である。中津城絵図（220、221）は同じ図柄であり、城下まで描かれている。小倉城絵図（219）は『主図合結記』（臼杵図書館蔵）の小倉城に類似している。

【D. 全国的な城郭修補願絵図（臼杵城修補願絵図は除く）】

城郭修補願絵図（控図）については、東北地方では秋田城（＝久保田城、711）、会津城（708）、米沢城（712）、東海地方では岡崎城（585）、近畿地方では宮津城（387）、山陽地方では岡山城（350）、山陰地方では米子城（358）、四国地方では高松城（319）、九州地方では中津城（217）、佐伯城（218）というように全国的な視野で収集している点は注目される。

上述のように稲葉家の居城である臼杵城の修補願絵図（控図）が伝存するのは当然としても、他の大名居城の修補願絵図（控図）を収集した意図やその入手ルートにはどのような背景があるのだろうか。単純に推測すれば、臼杵城の修補願絵図を作成する段階での参考資料として、幕府が保管している各城の修補願絵図を老中などの幕閣のルートから正本の絵図を臼杵藩が借り受けて写しの絵図を作成した、或いは、江戸留守居などのルートから他藩より控図を臼杵藩が借り受けて写しの絵図を作成した、ということが想定できる。

この修補願絵図の年次に着目してまとめたものが表5である。表5をみると、年次が不明の佐伯城修補願絵図（218）と宮津城修補願絵図（387）を除くと、他の修補願絵図は、文化9年（1812）

～文政12年(1829)の時期(18年間)に集中していることがわかる。つまり、文化9年以降の文化・文政期、或いは、それより少しあとの時代に収集されたと推測できる。収集の方法としては、これらの修補願絵図を一つの時期に一括して収集した可能性と、多年次的にバラバラにその都度収集した可能性の両方が考えられる。なお、修補願絵図の大きさに着目すると、長辺・短辺ともに50cm未満の米子城修補願絵図を除くと、長辺・短辺ともに80cm以上120cm以内の長さに合致するか、或いは、近似するケースが多いことがわかるので、このことは筆者(白峰)が以前、修補願絵図の大きさは長辺・短辺ともに100cm程度の長さが規格化の基準である(その時の筆者〔白峰〕の調査事例では約40%が長辺・短辺ともに100cm前後〔±20cm〕であった)と指摘した点⁽⁵⁾と一致する。

【E. 島原城の絵図】

島原城の絵図は8点確認できる(242、243、250、251、252、253、255、256)。『報告書』では、このうち242、250、255、256について、寛文8年(1668)の稲葉信通の島原城在番(島原城主高力高長の改易によるもの)との関係を想定している。よって、島原城の絵図は寛文8年に作成されたと考えてよからう。このほか、原城絵図(244)についても、原図は寛文8年の島原城在番時に作成された、と推測している(ただし、この絵図が写されたのは延宝2年12月22日である)。

【F. 他国の城絵図】

他国の城絵図については、九州・四国・中国・近畿・中部・関東・東北・蝦夷というように全国的に各地方の城絵図を広範に収集している。これだけの大量の城絵図を一度に収集したとは考え難いので、収集した各画期(時代)や収集したそれぞれの企図を考えるヒントとして、特にこの中でトピック(=テーマ)として注目される項目を以下のF1～F8として設定した。

【F1. 美濃での稲葉家ゆかりの城絵図】

慶長5年(1600)に稲葉貞通が豊後国臼杵に入部して以後、稲葉家当主が歴代の臼杵藩主として明治維新まで続いたが、それまでの稲葉家の本貫地は美濃国内にあり、美濃国内が稲葉家のルーツの土地であった。この美濃国内で稲葉家が関係した城郭は、郡上八幡城(臼杵への転封以前の稲葉貞通の居城)、曾根城(稲葉貞通の父である同一鉄の居城)、清水城(稲葉一鉄の居城)、揖斐城(稲葉一鉄が支配下においた城)であり、こうした城の絵図が確認できる。

具体的には、郡上八幡城絵図(501、502、503)、曾根城絵図(492、493、494、495、496、497)、清水城・揖斐城絵図(498、499)であり、『報告書』では、曾根城絵図(496)について美濃国曾根城跡を調査した時の絵図と推定しているほか、清水城・揖斐城絵図(498)について稲葉家先祖(調査)などを目的として描かれた絵図と推定している。また、郡上八幡城絵図(503)について、慶長期の稲葉家郡上八幡在城時の考証絵図と推定している。こうした『報告書』の記載を考慮すると、これらの絵図は明確な時代の比定はできないものの、江戸時代中期～後期にかけて、臼杵藩が藩祖の稲葉貞通やその父である同一鉄を顕彰する目的で、実際に美濃国内の関係箇所(稲葉家ゆかりの城跡)に家臣を派遣して実地調査し作成した城絵図である、と考定できよう。

【F2. 延宝2年(延宝期も含む)に写した城絵図】

延宝2年に写した城絵図は10点ある(244、321、362、385、391、436、468、550、577、640)。これらの城絵図を写した時期は、延宝2年10月下旬(385)、同年11月23日(362、550)、同年11月25日(321、391、436、468)、同年12月12日(640)、同年12月22日(244)であり、特定の時期に集中している点は注目される。このように、同年10月～12月にかけて集中的に城絵図を写していることがわかるが、特に延宝2年11月25日には4点、同月23日には2点の城絵図が写されている。

そのほか、延宝期に写したと推測される城絵図(361、432)、延宝6年5月8日に写した城絵

図(533)もある。

城絵図以外に、合戦図についても延宝2年10月上旬(505)、同3年6月5日(401)、同6年正月17日(397、647)に写したものがある。

このように、延宝2年を中心とする延宝期に城絵図や合戦図を集中的に写した背景には何があったのであろうか(ちなみに、延宝期の臼杵藩主は稲葉景通である)。その点について現段階では明確な回答を出せないが、この時期に何らかの意図のもとに城絵図や合戦図をまとめて写したことは容易に推察できる(例えば、延宝2年10月～同年12月に絵師を雇って臼杵藩の江戸藩邸で城絵図を写す作業を集中的におこなった可能性も考えられよう)。なお、これらの城絵図の特徴としては、①古城図は原城絵図だけであり、他はすべて当時現役で機能していた大名居城の城絵図である(ただし、大坂城、二条城は幕府直轄城郭)、②城絵図の地域的分布を見ると地域的な偏りは見られない、という点がわかる。この中で①の特徴は、後述するF3の分類の城絵図において、現役の大名居城の城絵図は1つのみであって、他は縄張図、或いは古城図である点とは対照的である。

【F3. 寛政11年～同12年(寛政期も含む)に作成した城絵図】

寛政11年に作成した城絵図は同年4月に作成したものが3点あり(782、783、784)、同年6月勝軍日に作成したものが1点ある(19)。この合計4点の城絵図はいずれも縄張図であるが、実在の城の縄張図であるのかどうか、という点は『報告書』の摘要の記載では触れていない。

寛政12年(1800)に作成した城絵図は、同年5月(武田氏館絵図…630)、同年6月8日(村上城絵図…611)、同年11月(武田氏館絵図…631)に作成した絵図がそれぞれ1点ある。

また、寛政期頃に作成したと推測される城絵図が3点あるほか(与板古城図…609、越後萩城の古図…610、縄張図…765)、寛政3年(1791)4月に作成した城絵図が2点(宇土古城絵図…284、285)、同年5月に作成した城絵図が1点(架空の城絵図…18)ある。

これらの城絵図の特徴を考えると、①寛政11年に作成した城絵図4点はすべて縄張図である、②寛政12年に作成した城絵図3点のうち2点は古城絵図であり、1点は当時現役で機能していた大名居城の絵図である、③寛政期頃、及び寛政3年に作成した城絵図の合計5点のうち4点は古城絵図、1点は縄張図である、ということがわかる。

こうした点を考慮すると、寛政期に作成された城絵図(縄張図、古城絵図)は軍学との関連が想定される。例えば、『報告書』では、782、783、784の縄張図について「金田富之進正道作図。渡並武七添削」としているので、縄張図を作図した人物(金田正道)とその縄張図を添削した人物(渡並景倭〔武七])がいたことがわかる。また、284の縄張図(宇土古城絵図)には、らい紙に「要門未守権征軍師春山剛弼 渡並武七景倭謹縄張ス」と記されており、「権征軍師春山剛弼」と渡並景倭が「縄張ス」というのは、この2人が縄張図を作成した、と解釈することができる。この場合の「権征軍師春山剛弼」とは、陸奥南部藩の兵法学者(上杉流兵法)である新渡戸維民にとべこれたみ(明和6年〔1769〕～弘化2年〔1845〕)のことを指す⁽⁶⁾。

また、765の縄張図は佐久間頼母助入道が作図をしたが、らい紙に「権征軍師融政剛弼」と記されているので、新渡戸維民がこの縄張図を閲覧して、何らかの評価を出したものと思われる。

285の縄張図(宇土古城絵図)には「井門常頭謹考」と記されており、「謹考」というのは、井門常頭が縄張図を作成した、と解釈することができる。609の与板古城絵図については、包紙ウハ書に「井伊兵部少輔家来三輪飛兵衛紙図二枚」と記されている。そして「景倭」(渡並景倭)が「古城御縄張一段宜御出来珍重」とのコメントを寄せている。よって、「井伊兵部少輔」(越後与板藩主井伊直朗カ)の家臣である「三輪飛兵衛」が作成した与板古城の縄張図を渡並景倭が閲覧して「一段宜御出来」との評価を出したものと思われる。

新渡戸維民と渡並景倭が作成した18の城絵図は架空の城絵図であり、『報告書』では19の縄張図に近似し、臼杵での築城を想定したものか、と指摘している。19の城絵図（縄張図）は稲葉雍通が作成したもので、「権征軍師春山剛弼」、「要門未守 渡並武七」、「藤原景倭（印）」等の署名がある。よって、稲葉雍通が作成した19の城絵図（縄張図）を、新渡戸維民と渡並景倭が閲覧して何らかの評価を出したものと思われる。ちなみに、稲葉雍通は寛政12年～文政3年（1820）までの臼杵藩主であり、この城絵図を作成した寛政11年は藩主就任の前年にあたる。

以上の諸点をまとめると表6のようになるが、表6を見るとわかるように、渡並景倭は縄張図の添削をしたり、コメントを記していることから、他者が作成した縄張図に対して評価を与える立場にあったと推察される。つまり、縄張図作成者に対してレクチャーやアドバイスをおこない得る人物であることから軍学者であったと思われるが、平井義人氏は『稲葉家譜』寛政7年（1795）7月11日条の記載から、渡並景倭が熊本藩の支藩である宇土藩細川氏の家臣であり、11代臼杵藩主の稲葉雍通は親交厚い宇土藩細川氏の家臣を「兵学者」として迎え、江戸藩邸にて縄張案等の兵法を学んでいた、と指摘している⁽⁷⁾。

さらに、『稲葉家譜』天保9年（1838）12月2日条に、臼杵藩の江戸藩邸において、13代臼杵藩主の稲葉幾通が渡並景庭（武七）から「軍法」の講義を受けたという記載があることから、こうした「軍法」の受講に際して縄張図案や全国のいくつかの城絵図の写しが作成された、と平井氏は指摘している⁽⁸⁾。『稲葉家譜』天保9年12月2日条には、渡並景庭の軍学は「謙信流」であったことが記されているので、渡並景倭の軍学も謙信流であったとすると、上述のように、南部藩の上杉流兵法学者である新渡戸維民と渡並景倭は同じ謙信流（上杉流）の軍学者ということになり、この2人が共同で城絵図作成など（18、19、284）をおこなった背景もよく理解できる。そして、この2人が共同で宇土古城絵図（縄張図）（284）を作成していることは、渡並景倭の出身藩である宇土藩の地元の古城を取り上げたと考えることもできよう。

こうした諸点を勘案すると、新渡戸維民も臼杵藩の江戸藩邸において臼杵藩主稲葉雍通に軍学（縄張り研究など）を講義した可能性が想定できる。いずれにせよ、臼杵藩主が他藩の軍学者から講義を受けた様相がわかり、江戸における大名と軍学者の交流が具体的に読み取れる点は興味深い。

縄張図として古城絵図が多いことの意味としては、当時実際に機能していた大名居城は外部の者が自由に出入りすることができなかつたので、自由に調査できる古城跡を実際に踏査して縄張図を作成し、その縄張図の出来栄の優劣を軍学者が評価したと推測され、こうした点と関係したのではないだろうか。また、戦国時代の古城跡は実戦（合戦）を経験していたケースが多かつたことも縄張り研究の対象となった要因かもしれない。

なお、臼杵藩所蔵の城絵図・合戦図・国絵図のチェックリストである『城・合戦・国々図目録』（関連資料番号239）が寛政11年7月に作成されたが、上記の同11年～同12年における縄張図・古城絵図の作成と同時期である点は注目される。つまり、この時期（寛政11年～同12年）に城絵図の作成だけでなく、城絵図の管理も臼杵藩内でおこなわれていたことを示している。特に『城・合戦・国々図目録』の城図119点のうち、古城図が17点含まれていることから、軍学的視点も含めて一定の意図（或いは基準）のもとに、これらの城絵図をリストアップしたと考えられる（ちなみに、『城・合戦・国々図目録』の城図119点は全国の城絵図を網羅したものではなく、土佐国、薩摩国など城絵図を収録していない国々が20ヶ国ある）。

【F 4. 古城の絵図】

古城の絵図は表4を見るとわかるように、肥前名護屋城、伏見城、聚楽第、清洲城、春日山城、武田氏館、石垣山城など著名な古城が多い。よって、軍学の視点をもとに縄張り研究や合戦

研究との関連から作成された可能性も考えられよう。ちなみに、春日山城跡の絵図には、「春山剛弼」、「渡並武七」、「藤原景倭」の記載があるので、新渡戸維民と渡並景倭がこの絵図を作成したか、或いは、作成されたこの絵図を閲覧して何らかの評価を出した可能性が考えられる。

【F 5. 古城についての考証図】

『報告書』では、5点の古城絵図（434、435、503、609、610）を、古城に関する後世の考証図としているが、考証の目的が稲葉家の旧居城であった郡上八幡城絵図のように、稲葉家のルーツにかかわる顕彰目的であったケース（503）と、純粋な軍学研究（縄張り研究）目的のためであったケース（434、435、609、610）とに峻別する必要があるだろう。

【F 6. 正保城絵図に類似した城絵図】

『報告書』では、正保城絵図に類似した城絵図として12点の絵図を指摘し、①正保城絵図の正本作成のためのサンプル（23…臼杵城絵図）、②正保城絵図の下書き（24…臼杵城絵図）、③正保城絵図に描かれているものと大差がない絵図（325…徳島城絵図）、④正保城絵図の写し（380…洲本城絵図）、⑤正保系の城絵図に近い絵図（445…和歌山城絵図）、⑥正保城図系の写しか、とする絵図（551…松代城絵図、698、699…白石城絵図、702、703…仙台城絵図）、⑦正保城絵図との共通性が見いだせる絵図（田中城絵図…566）、⑧正保城絵図に類似か、とする絵図（579…掛川城絵図）、というように分類している。

このように、12点の絵図すべてを正保城絵図系としてひとまとめにするのではなく、中には評価するうえで検討の余地を残すケースもあることがわかる。こうした点を明確に解明するため、今後は内閣文庫などに正保城絵図が残っている場合は、正保城絵図との比較検討が必要であろうし、正保城絵図が残っていない場合は、記載様式などの描写内容を考察して正保城絵図と断定できるかどうか検討する必要があるだろう。そして、正保城絵図と断定できた場合、他に正保城絵図が伝存していないケースでは貴重な事例であると評価できるであろう。そのほか、上述の臼杵城絵図のケース（23、24）は、正保城絵図の作成過程を考察するうえで重要な事例である。

なお、正保城絵図の写しを作成したとすれば、上述した城郭修補願絵図の場合と同様に、老中など幕閣のルートから正本の絵図を臼杵藩が借り受けて写しの絵図を作成した、或いは、江戸留守居などのルートから他藩より控図を臼杵藩が借り受けて写しの絵図を作成した、ということが想定できる。

正保城絵図に類似した城絵図を作成・収集した目的については、現段階では明確な回答を出せないが、幕府による正保城絵図の調進命令と同様の命令が後の時代に出ることを想定して、臼杵藩として独自に過去のサンプルとして収集した可能性も考えられよう。

【F 7. 軍学テキストの城絵図】

『報告書』では、浅野文庫蔵『諸国古城之図』に類似した城絵図（434、435…聚楽古城絵図、570…興国寺城絵図）、浅野文庫蔵『諸国当城之図』に類似した城絵図（602、603…越後高田城絵図、683…宇都宮城絵図）、尊経閣文庫蔵『諸国居城図』に類似した城絵図（453…彦根城絵図）、『主図合結記』系の城絵図（219…豊前小倉城絵図、288…筑前福岡城絵図、297…筑後柳川城絵図、684…下野宇都宮城絵図）などの存在を指摘しているが、これらの城絵図は軍学テキストの城絵図として1つのカテゴリーにまとめることができよう。

これらの城絵図を収集した背景には、F 3の分類で上述したように、縄張り図作成における軍学者のレクチャーとの関連を想起すれば、軍学の縄張り研究におけるテキストとして収集・作成されたと見なすことができる。

こうした軍学系の城絵図は一般的に城絵図としての精度が低いと評価されているが、F 3の分類で上述したように、古城跡を実際に踏査して縄張り図を作成し、その縄張り図の出来栄の優劣を

軍学者が評価したケースがあったとすれば、軍学において縄張図を描く際の独自の表現様式（または記号論）が存在したとも考えられるので、そうした根本的な部分から再検討して軍学系の城絵図を再評価する必要があるだろう。

なお、軍学的情報を重視した小浜城絵図（528）、軍学の兵用図として用いられたと推測される関宿城絵図（650）、墨線を太い墨線で描いた兵法用の城絵図である土浦城絵図（651）も、このカテゴリーに含めてよいであろう。

【F 8. 天下普請での丁場割図】

大坂城の普請丁場割図として392、393の2点の城絵図がある。『報告書』では、この2点の普請丁場割図は同じ図柄であり、393について、「稲葉民部少輔」（臼杵藩主稲葉一通）の丁場割当部分が見えることから、寛永5年2月の大坂城二の丸南面石垣普請の丁場を示していると指摘している。こうした点を考慮すれば、この2点の大坂城普請丁場割図は、本来臼杵藩に伝存した絵図である、と評価できよう。

なお、『報告書』では、392を「その他（丁割図）」、393を「城絵図」にそれぞれ分類しているが、同じ図柄の城絵図でありながら、このように分類が違っている理由は不明である。今後は、他所に伝存する同種の大坂城普請丁場割図との比較検討が必要であろう。

【G. 縄張図を中心とした軍学関係の城絵図】

このカテゴリーは、『報告書』で「10. 軍学関係」に区分している741～788の絵図の中で城絵図に該当する部分である。このカテゴリーの特徴としては、城の縄張図（或いは、縄張図案）が31点あり、このカテゴリーの大部分を占めているということと、添削を受けた縄張図が多い（22点ある）ということである。このことは、上記F 3及びF 7の分類で述べたように、軍学（縄張り研究）との関係を明確に示すものであろう。

添削の具体的文言としては、「ケ様ニ虎口不宜候」（747）、「ケ様ニ見通不宜候」（748）、「此所虎口近シ」（749）というように、虎口の適否や遠近、見通しの適否について記しており、添削指導の具体的内容がわかる。このことから、軍学の縄張り研究においてどのような点にポイントをおいて城の縄張りを検討したのかが理解できるという意味で重要である。

添削者としては、渡並景倭（武七）が11点（758、759、760、761、762、763、764、782、783、784、785）の縄張図の添削をおこなっている（そのうち4点〔782、783、784、785〕は金田富之進正道が作図）。この渡並景倭は、上記のF 3の分類でも述べたように、11代臼杵藩主の稲葉雍通に対して「兵学師」として臼杵藩の江戸藩邸において縄張案等の軍学を教授したとされる人物であった。表6からわかるように、渡並景倭が関与した城絵図は寛政3年、或いは、同11年の絵図であるので、渡並景倭が添削した上記の縄張図11点のうち年次不明の8点（758、759、760、761、762、763、764、785）は寛政期頃に比定してよからう。

このカテゴリーの縄張図には、渡並景倭以外に、「佐久間頼母助入道」（765の縄張図を作図）、新渡戸維民（765の縄張図を閲覧して評価を出したか?）、「景高先生」⁽⁹⁾（776の城絵図を作図）、「千葉之助自秀」（779、780、781の城絵図を作図）、「井上利章」（779の城絵図に名前の記載がある）などの人名も関係していることがわかるので、これらの人名の検討を深めることも今後必要であろう。

このほか、縄張図の中には架空の城の縄張図や城絵図もある（769、787、788）。架空の城絵図については、上記のF 3の分類でも述べたように、寛政3年5月の城絵図（18）も架空の城絵図であり、この場合、新渡戸維民と渡並景倭が作成者であることから、架空の城の縄張図や城絵図は軍学（縄張り研究）のレクチャーなどで使用した可能性が高い。このように、軍学（縄張り研究）では実在の城（古城など）の絵図以外に、架空の城の縄張図や城絵図をも使用して、城の縄

張りについてシミュレーションをおこなっていたことが推測できる。

以上のように、多数の縄張図が残されていることは、城の縄張図を作図し、それを軍学者が添削する（或いは、軍学者が縄張図を作成する）、という軍学（縄張り研究）のレクチャーにおいて、縄張図の占める位置が極めて高かったことを示すものと言えよう。

【H. 損傷絵図】

『報告書』では損傷絵図286点については、城絵図、城下絵図などの分類を表記していないが、表4に示したように、資料名から城絵図（古城絵図も含む）、城下絵図に該当すると考えられるものをピックアップすると119点あり、損傷絵図の中で41.6%を占めている。よって、損傷絵図においても城絵図、城下絵図の占める割合は高いと言える。

4. おわりに

以上のように、臼杵市所蔵絵図資料群における城絵図は膨大な数であり、城絵図群といえるものであるが、これだけの城絵図は一度に作成・収集されたのではなく、江戸時代を通して各時期に積層的（多年次的）に作成・収集された、と考えるべきであろう。その作成・収集の画期としては、本稿で考察したように江戸時代前期の寛文期（上述のE分類）、延宝期（上述のF2分類）、江戸時代後期の寛政期（上述のF3分類）、文化・文政期頃（上述のD分類）などが設定できる。よって、城絵図群の作成・収集は必ずしも江戸時代前期に限定されたものではなかったことがわかるが、今後は、個々の城絵図の内容をさらに深く検討することによって、上記以外の時代的画期を考察していく必要があるだろう。

このように、城絵図の作成・収集の画期が江戸時代前期から後期まで、いくつかの画期に分かれるということは、城絵図の作成・収集の目的も一つ（一元的）だったのではなく、多元的だったことを示すものといえよう。そして、この江戸時代前期から後期までのいくつかの時代的画期を考慮すると、城絵図については、“江戸時代前半期の絵図が多い”という上述の川村氏による絵図資料群についての指摘は必ずしも当てはまらないことがわかる。

上述の寛政期、文化・文政期頃の画期との時代的関連という点では、臼杵藩で『城・合戦・国々図目録』（関連資料328）が寛政11年に作成され⁽¹⁰⁾、その後、文化14年（1817）、同15年（1818）、文政5年（1822）、同8年（1825）に各絵図の員数チェックがおこなわれたことが注目される。このことは、江戸時代後期（寛政期・文化期・文政期）になって臼杵藩内で城絵図・合戦図・国々の絵図を絵図群として管理する本格的な動きが出てきたことを示すとともに、臼杵藩内で城絵図・合戦図・国々の絵図が重要度の高い絵図であると認識されていたことを示すものであろう。この重要度という点については、臼杵市所蔵絵図資料群1081点の中で損傷絵図286点を除く795点のうち、城絵図が211点（26.5%）、国絵図関連が144点（18.1%）、合戦図が100点（12.6%）というように点数では上位の1～3位を占めている（表2参照）ことから首肯できる。

臼杵市所蔵絵図資料群において城絵図の数が非常に多いことは、臼杵藩（稲葉家）において他藩の城も含めた城郭絵図への問題関心の高さに起因していたことは勿論であろうが、全国的な範囲で城絵図を多く作成・収集することが他藩に類例がなく、臼杵藩に限った特異なことであったのか否かを検討する必要もあると思われる。例えば、岡山藩（池田家）旧蔵の絵図群においても、現在の岡山大学附属図書館池田家文庫に多くの城絵図が収蔵されており、大名家の石高の格差は別にして、同じようなケースが他の大名家においても一般的に見られたのではないかと、いうことをマクロ的に検討すべきであろう。そのうえで、大名家において城絵図を広範囲に収集・作成することの根本的意味を改めて考察する必要があるだろう。

その点に関連してヒントとなるのが、上述したように、臼杵藩主が江戸で軍学者から軍学（縄張り研究など）の講義を受けたことであり、この講義のテキストとして多くの縄張図や城絵図が必要になり、大名家としての潤沢な資金力をバックにして大規模に全国の城絵図を収集する動きへとつながったのではないだろうか。縄張図は教学のため軍学者の指導のもと藩主自ら作図することもあったと思われるが、大量の城絵図の写しを特定の時期〔上記で指摘した延宝期など〕に集中して作成する場合は、藩のお抱え絵師がいなければ専門の絵師を一定期間雇うか、或いは依頼しなければならず、そのためには豊富な資金力が必要だったはずである。このように臼杵藩主と軍学との関係が臼杵市所蔵絵図資料群において城絵図の数が膨大になった一つの要因であろうが、こうした全国的な城絵図収集の動きが他の大名家でも同様に見られたとすれば、需要と供給の関係で江戸では軍学系の城絵図（城絵図としての精度は低いかもしれないが）を大量にまとめて各大名家へ売り込むようなブローカーが存在したと推測できる。このことが、『主図合結記』のような軍学系城絵図集が大名家を中心として広く流布した背景にあるのではないだろうか。

臼杵市所蔵絵図資料群における城絵図は、一つの城に複数の絵図（2枚～4枚程度）が存在しているケースが多く（表4参照）、中には同じ図柄の城絵図も存在する（例えば、321と322）。このことも、上述したように大名が軍学の講義を受ける際に城絵図を使用したことと密接にかかわると考えられる。つまり、縄張り研究などで城絵図を作成し、それを軍学者が添削指導するということを繰り返しおこなうので、同じ城の同じ図柄の絵図が何枚も（複数）出来上がる、ということになったのであろう。そのことも城絵図の数が非常に多くなった一因であろう。

こうした推測も含めて、今後いろいろな角度から考察を深めていくべきであるが、そのほか、城郭研究の今日的課題との関連では、現代の縄張り研究と寛政期を中心とした江戸時代後期における縄張り研究との違いを理解するために、当時の軍学者が縄張図中の何を具体的に添削したのかを、臼杵市所蔵絵図資料群における縄張図を使って現代の縄張り研究者が検討してみることも必要なのではないだろうか。そして、軍学のテキストとしての縄張図において、どのような記載様式の法則性が見られるのかを読み解くことにより、軍学における城郭のとらえ方の本質が理解できると思われる。

付言すれば、軍学系の縄張図（『主図合結記』など）は、一般的に城絵図としての精度は低いと評価されているが、軍学の解釈としては、軍学における独自の記号論が存在し、その記号論を通して城郭の構造を読み解くことが目的だったと考えることもできよう。その意味では、軍学における縄張り研究では現状に則した正確で詳細な城絵図を描くのではなく、軍学の尺度（スケール）に合わせて簡略にデフォルメされた城絵図を描くことが基本原則だったのかもしれない。

今後の課題としては、本稿で指摘した俯瞰的見解を前提として、個々の城絵図を城郭史の視点から詳細に読み解いていく作業が必要であるほか⁽⁴¹⁾、軍学者による縄張り等の講義が藩学として臼杵藩家臣全体に行き渡っていたのか、或いは、江戸での軍学者と臼杵藩主（及び一部の家臣）とのパーソナルな関係に限定されたものであったのか、という点に関する検討も必要であろう。さらに、臼杵藩主と謙信流（上杉流）軍学との関係がいつの時代から始まったのかという点について考察することが臼杵藩での軍学関係の城絵図収集の開始時期を特定する手掛かりにもなると考えられるが、こうした諸点の考察については他日を期したい。

【付記】

『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』の閲覧にあたっては、臼杵市教育委員会文化財課の岡村一幸氏の御高配に預かった。この場を借りて謝意を表する次第である。

[註]

- (1) 『白杵市所蔵絵図資料群調査報告書』(白杵市教育委員会、2005年)。
- (2) 平井義人「白杵藩における絵図の製作と利用・管理に関する若干の考察」(前掲『白杵市所蔵絵図資料群調査報告書』、71～83頁)。
- (3) 川村博忠「白杵に残る大量の近世絵図―収集の謎に迫る―」(白杵市文化財講演会での発表レジュメ、2007年3月24日、於：白杵市立白杵中央公民館)。
- (4) 岡田山城絵図の資料名は「豊州岡田山之城図」(215)であり、豊前か豊後か明確ではないが、豊後府内城絵図の資料名が「豊州府内之城図」(214)であることを考慮し、豊後として考定した。
- (5) 拙稿「城郭修補絵図諸元比較一覧表(改訂版)」(『城館研究論集』 発刊準備号、仮称城館学会、2001年)。
- (6) <http://www.towada.or.jp/nitobe/frontier200011.htm>。 <http://www.towada.or.jp/nitobe/I9.htm>。ちなみに、新渡戸維民は、大正9年(1920)に国際連盟事務次長に就任した新渡戸稲造の曾祖父にあたる。
- (7) 前掲註(2)に同じ。ただし、平井論文に史料引用された『稲葉家譜』寛政7年7月11日条の記載内容は、「兵学師」渡並景倭の「伝所」により新たに甲冑を作製することを白杵藩主稲葉雍通が命じた、というものであり、白杵藩の江戸藩邸で稲葉雍通が渡並景倭から縄張案等の兵法を学んだという記載内容ではない。
- (8) 前掲註(2)に同じ。
- (9) 上述した軍学者の渡並景倭・同景庭の名前から関連して推測すると、軍学者として渡並景高という人物が存在した可能性も考えられる。
- (10) 『城・合戦・国々図目録』にリストアップされている城絵図には、江戸時代における大名居城の城絵図だけでなく、戦国時代の古城絵図のほか、さらに時代を溯った楠木正成関係の上赤坂城図、下赤坂城図、河州金剛山之図(楠木正成が金剛山に築いた要害と関係するか?)や、本来城郭とは関連がない禁中之図、頼朝御所之図なども含まれており、この場合の城絵図がどのような基準で選ばれたのかを軍学との関連も含めて今後考察する必要がある。
- (11) 個々の城絵図の描写内容を検討することにより、場合によっては、『報告書』における城名の比定を是正するケースが出てくるかもしれない。

表1 報告書の区分と対応する絵図番号 (番号は通番)

報告書の区分	各絵図の通番	絵図の点数	報告書の頁数
1. 臼杵藩関連	1番～157番	157点	131頁～141頁
2. 豊後・豊前国関連	158番～234番	77点	141頁～145頁
3. 九州地方関連 (既出分は除く)	235番～308番	74点	145頁～149頁
4. 中国・四国地方関連	309番～362番	54点	149頁～151頁
5. 近畿地方関連	363番～464番	102点	151頁～156頁
6. 中部地方関連	465番～619番	155点	156頁～163頁
7. 関東地方関連	620番～692番	73点	163頁～167頁
8. 東北地方・「蝦夷地」関連	693番～724番	32点	167頁～168頁
9. 世界図・外国図・日本図	725番～740番	16点	169頁～170頁
10. 軍学関係	741番～788番	48点	170頁～172頁
11. その他	789番～795番	7点	172頁
損傷絵図	796番～1081番	286点	173頁～176頁
	合 計	1081点	

※表1は『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』(臼杵市教育委員会、2005年)の内容をもとに作成した。

表2 報告書による絵図の分類

※以下では各分類における絵図の点数の多いものからソートをかけた。

※%の計算は小数点第二位を四捨五入した。

絵図の分類	絵図の点数	%	絵図の分類	絵図の点数	%
城絵図	211	26.5%	航路図	3	0.4%
国絵図関連	144	18.1%	その他(考証図)	3	0.4%
合戦図	100	12.6%	境界図	2	0.3%
城下絵図	89	11.2%	海岸図	2	0.3%
地域図	27	3.4%	その他(近代)	2	0.3%
都市図	20	2.5%	その他(地図)	2	0.3%
その他(指図)	16	2.0%	その他(儀礼図)	2	0.3%
村絵図	15	1.9%	その他(禁裏図)	2	0.3%
その他(地籍図)	13	1.6%	その他(新田図)	2	0.3%
領内絵図	12	1.5%	その他(島嶼図)	2	0.3%
道中図	11	1.4%	屋敷図	1	0.1%
町絵図	10	1.3%	その他(受持図)	1	0.1%
道路図	10	1.3%	その他(道路計画図)	1	0.1%
沿岸図	9	1.1%	その他(由来図)	1	0.1%
社寺境内図	9	1.1%	その他(近代刊行物)	1	0.1%
区域図	8	1.0%	その他(雛形)	1	0.1%
その他(境界図)	8	1.0%	その他(屋敷図)	1	0.1%
郡絵図	7	0.9%	その他(庭園図)	1	0.1%
外国図	7	0.9%	その他(敷地図)	1	0.1%
その他(砲台図)	7	0.9%	その他(丁割図)	1	0.1%
その他(農地関係)	6	0.8%	その他(湖岸図)	1	0.1%
世界図	5	0.6%	その他(陣屋配置図)	1	0.1%
川筋図	4	0.5%	146番※分類なし	1	0.1%
その他(測量図)	4	0.5%	314番※分類なし	1	0.1%
その他(領内図)	4	0.5%			
名勝図	3	0.4%	合 計	795	100.1%

※表2は『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』(臼杵市教育委員会、2005年)の内容をもとに作成した。

表3 臼杵市所蔵の城絵図群についてのカテゴリー分け (白峰案)

A. 臼杵城関係の絵図	→臼杵城
B. 豊後国内の城絵図	→府内城、岡田山城
C. 豊前国内の城絵図	→中津城、小倉城
D. 全国的な城郭修補願絵図 (臼杵城修補願絵図は除く)	→10ヶ所の城絵図
E. 島原城の絵図	→寛文8年の島原城在番と関係する
F. 他国の城絵図	→ただし、豊前国内の城絵図 (上記C)、全国的な城郭修補願絵図 (上記D)、島原城の絵図 (上記E) は除く ※Fの中で特にトピック (=テーマ) として注目される項目を以下のF1～F8として示した。よって、以下のF1～F8の各絵図の通番は上記Fに含まれる。
—F1. 美濃での稲葉家ゆかりの城絵図	
—F2. 延宝2年 (延宝期も含む) に写した城絵図	→江戸時代前期
—F3. 寛政11年～同12年 (寛政期も含む) に作成した城絵図	→江戸時代後期
—F4. 古城の絵図	
—F5. 古城についての考証図	
—F6. 正保城絵図に類似した城絵図	
—F7. 軍学テキストの城絵図	→浅野文庫蔵『諸国古城之図』、浅野文庫蔵『諸国当城之図』、尊経閣文庫蔵『諸国居城図』に類似した城絵図、『主図合結記』系の城絵図、軍学的情報を重視した城絵図
—F8. 天下普請での丁場割図	→大坂城関係の2図のみ
G. 縄張図を中心とした軍学関係の城絵図	
H. 損傷絵図	→城絵図 (古城絵図も含む)、城下絵図も多く含まれている

表4 臼杵市所蔵の城絵図群についてのカテゴリー分け（白峰案）と各絵図の通番の対応関係

【A. 臼杵城関係の絵図】

臼杵城絵図	1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、20
臼杵城修補願絵図	1、2、3、5、6、14、16、17
臼杵城下絵図	21、22、23、24、25、26、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38
臼杵城御殿絵図（指図）	100、101、102、103、108、110
正保城絵図(臼杵城絵図)に似ている絵図	23、24

【B. 豊後国内の城絵図】

府内城絵図	212、213、214
佐伯城絵図	218
岡田山城絵図	215、216

【C. 豊前国内の城絵図】

中津城絵図	217、220、221
小倉城絵図	219

【D. 全国的な城郭修補願絵図（臼杵城修補願絵図は除く）】

城郭修補願絵図	217（中津城）、218（佐伯城）、319（高松城）、350（岡山城）、358（米子城）、387（宮津城）、585（岡崎城）、708（会津城）、711（秋田城）、712（米沢城） ※386（宮津城）も城郭修補願絵図と関係するか？
---------	---

【E. 島原城の絵図】 →寛文8年の島原城在番と関係する

島原城絵図	242、243、250、251、252、253、255、256 ※244（原城）も寛文8年の島原城在番と関係するか？
-------	---

【F. 他国の城絵図】 →ただし、豊前国内の城絵図（上記C）、全国的な城郭修補願絵図（上記D）、島原城の絵図（上記E）は除く

《九州》

肥前原城絵図	244、245、246、247、248、249
肥前富岡城絵図	259、260
肥前唐津城絵図	267、269、270
肥前名護屋城絵図	271、272、273
肥前長岡城絵図	274
肥後熊本城絵図	275、276、277、278、279

肥後球麻城絵図	280
肥後八代城絵図	281
肥後宇土城絵図	284、285
筑前福岡城絵図	286、287、288、289
筑後久留米城絵図	290、291、293、294、295、296
筑後柳川城絵図	297
日向延岡城(県城)絵図	300、301、302
薩摩鹿兒島城絵図	303

《四国》

伊予今治城絵図	315
讃岐高松城絵図	320
讃岐丸亀城絵図	321、322
阿波徳島城絵図	325、326

《中国》

長門国萩城絵図	334
安芸国広島城絵図	338
備後国福山城絵図	340、341
備後国三原城絵図	342、344
因幡鳥取城絵図	361、362

《近畿》

播磨姫路城絵図	371、373、374
播磨明石城絵図	372、375
淡路洲本城絵図	380
丹波亀山城絵図	383、384
丹波福知山城絵図	385
丹後宮津城絵図	386
摂津大坂城絵図	391、392、393、394
摂津尼崎城絵図	411
河内赤坂千早城絵図	416、417、418、420、421、422、423、424
山城伏見城絵図	430、431
山城二条城絵図	432、433
山城聚楽古城絵図	434、435

山城淀城絵図	436、437
紀伊和歌山城絵図	445
近江彦根城絵図	453
《中部》	
伊勢神戸城絵図	468、469
伊勢桑名城絵図	470、471
伊勢津城絵図	472、473
伊勢長島城絵図	474、475
志摩鳥羽城絵図	476
尾張清洲城絵図	479、480
尾張鳴海城絵図	481、482
美濃曾根城絵図	492、493、494、495、496、497
美濃清水城絵図・美濃揖斐城絵図	498、499
美濃郡上八幡城絵図	501、502、503
美濃大垣城絵図	507
若狭小浜城絵図	527、528
越前福井城絵図	530、531
越前大野城絵図	532
加賀金沢城絵図	533、534
信濃高遠城絵図	541、542
信濃牧之島城絵図	543、544
信濃上田城絵図	545、546
信濃飯田城絵図	547
信濃飯山城絵図	548
信濃海津城絵図	549
信濃松本城絵図	550
信濃松代城絵図	551
後の真田城絵図	553→827と関連するか？
駿河駿府城下の絵図	563、564
駿河田中城絵図	565、566
駿河江尻古城絵図	567、568
駿河沼津古城絵図	569

駿河興国寺城絵図	570
駿河清水城絵図	571
遠江掛川城絵図	577、578、579
遠江諏訪原城絵図	580、581
三河吉田城絵図	586
三河刈谷城絵図	587
三河西尾城絵図	588
越後高田城絵図	601、602、603、604
越後新発田城絵図	605、606
越後春日山城跡の絵図	607
越後長岡城絵図	608
越後与板古城絵図	609
越後萩城の古図	610
越後村上城絵図	611
伊豆山中古城絵図	618

《関東》

甲斐武田氏館の絵図	625、626、627、628、629、630、631
相模小田原城絵図	640、641
相模 ^(マモ) (武蔵カ)忍城絵図	642
相模石垣山古城絵図	643、644
相模津久井城絵図	645
下総佐倉城絵図	648、649
下総関宿城絵図	650
常陸土浦城絵図	651、652
常陸下館城絵図	653
武蔵江戸城絵図	662、663、664、666
武蔵忍城絵図	669
武蔵岩槻城絵図	670、671、672
上野箕輪城絵図	678、679
上野小幡城絵図	680、681
下野勝山古城絵図	682
下野宇都宮城絵図	683、684

下野壬生城絵図	685、686
上野館林城絵図	687
下総古河城絵図	688

《東北・蝦夷》

陸奥白石城絵図	698、699
陸奥白河城絵図	700、701
陸奥仙台城絵図	702、703
陸奥盛岡城絵図	704、705
出羽久保田城絵図	706
陸奥二本松城絵図	707
陸奥会津城絵図	709、710
蝦夷地陣屋配置図（公儀陣屋）	724

【F 1. 美濃での稲葉家ゆかりの城絵図】

美濃曾根城絵図	492、493、494、495、496、497
美濃清水城絵図・美濃揖斐城絵図	489、499
美濃郡上八幡城絵図	501、502、503

【F 2. 延宝2年（延宝期も含む）に写した城絵図】

《延宝2年に写した城絵図》

延宝2年10月上旬に写した絵図	505（美濃郡上）→これは城絵図ではなく合戦図
延宝2年10月下旬に写した城絵図	385（福知山城）
延宝2年11月23日に写した城絵図	362（鳥取城）、550（松本城）
延宝2年11月25日に写した城絵図	321（丸亀城）、391（大坂城）、436（淀城）、468（神戸城）
延宝2年12月12日に写した城絵図	640（小田原城）
延宝2年12月22日に写した城絵図	244（原城）
延宝2年に写した城絵図	577（掛川城）

《その他の延宝期》

延宝期の写か？	361（鳥取城）、432（二条城）
延宝3年6月5日に写した絵図	401（大坂冬の陣図）→これは城絵図ではなく合戦図
延宝6年正月17日に写した絵図	397（大坂冬の陣図）、647（相州三増合戦図） →これは城絵図ではなく合戦図
延宝6年5月8日に写した城絵図	533（金沢城）

【F 3. 寛政11年～同12年（寛政期も含む）に作成した城絵図】

《寛政11年に作成した城絵図》

寛政11年4月に作成した縄張図	782、783、784→実在の城の縄張図かどうか不詳
寛政11年6月勝軍日に作成した縄張図	19→実在の城の縄張図かどうか不詳

《寛政12年に作成した城絵図》

寛政12年5月に作成した城絵図	630（武田氏館）
寛政12年6月8日に作成した城絵図	611（村上城）
寛政12年11月に作成した城絵図	631（武田氏館）

《寛政期頃に作成した城絵図か？》

寛政期頃に作成した城絵図か？	609（与板古城絵図）、610（越後萩城の古図）、765（縄張図）
----------------	-----------------------------------

《寛政3年4月に作成した城絵図》

寛政3年4月に作成した城絵図	284、285（肥後宇土古城絵図）
----------------	-------------------

《寛政3年5月に作成した城絵図》

寛政3年5月に作成した城絵図	18（架空の城絵図）
----------------	------------

【F 4. 古城の絵図】

肥前名護屋古城絵図	271、272、273
肥後宇土古城絵図	284、285
山城伏見古城絵図	431
聚楽古城絵図	434、435
清洲古城絵図	479
鳴海古城絵図	481、482
曾根古城絵図	493
牧之島古城絵図	543
江尻古城絵図	567、568
沼津古城絵図	569
諏訪原古城絵図	580、581
春日山城跡の絵図	607
与板古城絵図	609
越後萩城の古図	610
伊豆山中古城絵図	618
甲斐武田氏館の絵図	625、626、627、628、629、630、631

相模石垣山古城絵図	643、644
相模津久井城絵図	645
下野勝山古城絵図	682
千葉之助自秀の城跡図	780、781

【F 5. 古城についての考証図】

古城についての考証図	434、435（聚楽第絵図）、503（郡上八幡城絵図）、609（与板古城絵図）、610（越後萩城の古図）
------------	--

【F 6. 正保城絵図に類似した城絵図】

正保城絵図に類似した城絵図	23、24（臼杵城絵図）、325（徳島城絵図）、380（洲本城絵図）、445（和歌山城絵図）、551（松代城絵図）、566（田中城絵図）、579（掛川城絵図）、698、699（白石城絵図）、702、703（仙台城絵図）
---------------	---

【F 7. 軍学テキストの城絵図】

浅野文庫蔵『諸国古城之図』に類似した城絵図	434、435（聚楽古城絵図）、570（興国寺城絵図）
浅野文庫蔵『諸国当城之図』に類似した城絵図	602、603（越後高田城絵図）、683（宇都宮城絵図）
尊経閣文庫蔵『諸国居城図』に類似した城絵図	453（彦根城絵図）
『主図合結記』系の城絵図	219（豊前小倉城絵図）、288（筑前福岡城絵図）、297（筑後柳川城絵図）、684（下野宇都宮城絵図）
軍学的情報を重視した城絵図	528（小浜城絵図）

【F 8. 天下普請での丁場割図】

大坂城普請（寛永期）での丁場割図	392、393
------------------	---------

【G. 縄張図を中心とした軍学関係の城絵図】

西尾城か？	742→609と関連するか？
城絵図一括26点（縄張図案か？）	743
城縄張図	745、746、747、748、749、750、751、752、753、754、755、756、757、758、759、760、761、762、763、764
佐久間頼母助入道作図の縄張図	765
城の図	768
城絵図（架空の城の縄張図か？）	769
城縄張図案一括	772、773

城縄張図案	774、775、778
景高先生の城図	776
城絵図ひな型	777
千葉之助城図	779
千葉之助自秀の城跡図	780、781
縄張図	782、783、784、785
方丈城図 (架空の城絵図か?)	787
城縄張絵図 (架空の城絵図か?)	788

※上記における絵図名については、便宜上、「〇〇城絵図」、「〇〇国〇〇城絵図」などというように表記を統一した。よって、『報告書』における各絵図名(資料名)とは異なるケースもある。

※上記における番号は『報告書』での各絵図の通番を示す。

※上記では、一つの番号(絵図の通番)をその性格から2つのカテゴリに入れたケースもあるので、その場合は番号が重複する。

※『報告書』において「城下絵図」、「合戦図」、「地域図」など「城絵図」以外に分類されていても城郭を描いた絵図については、上記において城絵図として扱った。

【H. 損傷絵図】

※『報告書』では損傷絵図286点については、城絵図、城下絵図などの分類を表記していないため、資料名だけでは城絵図なのか城下絵図なのか明確にわからないケースもある。よって、損傷絵図の中で城絵図(古城絵図も含む)、城下絵図に該当する絵図について、以下に各絵図名(資料名)と通番を『報告書』の記載のまま記すこととする。また、必要な場合は摘要から注記を引用した。さらに本稿筆者の補足注記は★印をつけて表記した。

(城下町絵図)	799	
駿州田中之城図	800	
越前大野	803	縄張図風の城下図
(城下絵図)	805	
(濃州山之崎城図)	809	
(臼杵城図・洲崎部分)	812	
信州飯田	815	
(城絵図)	816	
諏訪ヶ原城図	818	
信州牧嶋城図	819	
信州飯山城図	820	
予州興国寺	821	
三州吉田城之図	822	
信州海津	823	
信州後之真田城絵図(断簡)	827	★553と関連するか?
伏見城絵図断片	833	

千早城絵図外題部分	834	
信州松城断片	835	
芸州広島断片	836	
江州彦根断片	837	
(城絵図断片)	841	
(城絵図断片)	842	
(城絵図断片)	843	
(摂州大坂之図断片)	844	
丹波亀山城図	845	
駿州江尻古城之図	846	
臼杵城	850	
甲府町割図	851	
肥前唐津之図	852	
千早赤坂両城絵図	855	
駿州府中ノ城図	856	
(筑前国福岡城郭図断片)	860	
豊前小倉	861	
(城絵図)	864	
臼杵城図	866	
(屋敷指図)	867	臼杵城屋敷指図か？
(肥前島原城図外題断片)	871	
(宇都宮城下)	874	
(城下絵図)	876	
(城下絵図)	877	
甲州府中	878	
(城郭図)	886	墨書。二の丸堀に舟入、三の丸正面に馬出あり。
(紀州和歌山城図断片)	887	
(相州小田原城図断片)	888	
(関宿城図断片)	889	
(奥州二本松城図断片)	892	
(相州小田原城之図断片)	893	
(信州松城絵図断片)	894	松代城の城下町図。城内を中心に距離情報を含む。

(參州吉良郡西尾城図断片)	895	
越後高田城図	903	
古河城之図	907	
淀之城郭図	908	
駿州清水馬場美濃守繩張	909	★清水城か？
(城絵図)	910	
甲州古府之城	911	
清水古城	912	
[] 呂城図	913	
(城絵図)	914	
(下野壬生)	915	
(城絵図)	916	
摂州大坂図	924	
(城絵図)	926	
(臼杵城図)	927	
(臼杵城下図)	928	
(臼杵城洲崎部分断片)	929	
(臼杵城丹生島部分断片)	930	
(小倉城下町図)	937	
濃州大垣城図	938	
(唐津城下町図)	939	
(関宿城図断片)	940	
甲州御館	941	
(城下町図関係断片)	942	
豊後岡	944	
(城絵図断片)	956	臼杵城関係か？
野州勝山古城之図	961	
(城絵図断簡一括)	964	
(城絵図断片一括)	965	
館林之城図	967	
(城絵図断片一括)	969	
(広島城下図断片)	974	

(城下町図断片)	975	
(臼杵城関係図断片一括)	979	
(城下絵図断片)	983	
(臼杵城関係図断片)	985	
(臼杵城城下図断片)	986	
(臼杵城城下図断片)	987	
「御城下古絵図」表紙のみ	988	
羽州山形図	991	
(大坂城図)	994	
(城絵図)	999	
臼杵城下?図	1007	
和歌山城下絵図	1009	
城下町図断簡	1012	
武州忍城之図	1015	
阿波徳島渭津城図	1016	
城絵図	1017	
信濃国諏訪郡高嶋城絵図	1019	
武州忍城	1020	
城絵図	1024	
(城下絵図)	1032	
(城下絵図)	1035	
(臼杵城下図)	1038	
城絵図断簡	1043	
千早赤阪 ^(ママ) (坂カ)城	1047	
讃州高松城図	1048	
武州岩附惣絵図	1051	
相州津久井城	1052	
越後春日山城図	1053	
羽州山形城図	1057	
千早赤阪 ^(ママ) (坂カ)城絵図	1063	
下赤坂之城軍之事	1064	
曾根之城	1065	

羽州山形城図	1066	
羽州山形図	1068	
長州萩城図	1072	
羽州窪田	1073	
甲州新府	1074	
(臼杵城下図)	1075	
(越後高田城下図?)	1077	

表5 臼杵市所蔵の絵図群における城郭修補願絵図（臼杵城修補願絵図は除く）

※年代順にソートしたもの

通番	城名	年月日	西暦	絵図の大きさ
358	米子城	文化9年2月25日	1812	44×30cm
217	中津城	文化10年11月17日	1813	123×88cm
585	岡崎城	文化13年12月	1816	76×60cm
708	会津城	文化13年12月4日	1816	89×73cm
712	米沢城	文政元年6月	1818	86×77cm
319	高松城	文政6年正月	1823	88×84cm
350	岡山城	文政9年12月	1826	139×91cm
711	秋田城	文政12年3月	1829	108×83cm
218	佐伯城	年代不明	—	148×122cm
387	宮津城	年代不明	—	132×77cm

表6 寛政11年～同12年（寛政期も含む）に作成した城絵図

通番	城絵図	年月日	作成者・作図者	閲覧者・添削者
782	縄張図	寛政11年4月	金田富之進正道	渡並景倭…添削
783	縄張図	寛政11年4月	金田富之進正道	渡並景倭…添削
784	縄張図	寛政11年4月	金田富之進正道	渡並景倭…添削
19	縄張図	寛政11年6月勝軍日	稲葉雍通	新渡戸維民・渡並景倭…閲覧か？
630	武田氏館の絵図	寛政12年5月		
611	村上城絵図	寛政12年6月8日		
631	武田氏館の絵図	寛政12年11月		
609	与板古城絵図	寛政期頃か？	三輪飛兵衛(井伊兵部少輔の家臣)	渡並景倭…コメント
610	越後萩城の古図	寛政期頃か？		
765	縄張図	寛政期頃か？	佐久間頼母助入道	新渡戸維民…閲覧か？
284	宇土古城絵図(縄張図)	寛政3年4月	新渡戸維民・渡並景倭	
285	宇土古城絵図(縄張図)	寛政3年4月	井門常顕	
18	架空の城絵図	寛政3年5月	新渡戸維民・渡並景倭	

※上記以外に、春日山城跡の絵図(607)にも新渡戸維民(「春山剛弼」)・渡並景倭(「渡並武七」)・藤原景倭の名前の記載がある。『報告書』では、この絵図について、稲葉雍通の時代に作成か、としている。ちなみに、稲葉雍通が臼杵藩主であったのは寛政12年～文政3年である。